翻　刻

小津克孝『江戸日記』翻刻と解題―伊勢商人の江戸店滞在日記―

菱岡　憲司・龍泉寺　由佳

『江戸日記』は小津克孝（よしたか）による日録である。天保十年（一八三九）十一月十五日から翌十一年二月七日までの間、深川にある干鰯（ほしか）問屋湯浅屋の江戸店に滞在した様子を記録する。小津克孝は、湯浅屋与右衛門の六代目・小津久足（桂窓）の養子で、後に同家七代目を継ぐ。

このたび翻刻した『江戸日記』は、当初『小津久足紀行集（一～四）』（神道資料叢刊十四）に収録予定であったが、久足ではなく克孝の筆であると判明したため、収録を見送ったものである。しかし、松坂商人の江戸店における日常が知れる格好の資料であるため、今回あらためて翻刻紹介する次第である。なお、翻刻の礎稿は龍泉寺と菱岡が分担し、最終的に菱岡が見直した。以下、書誌を記すが、新型コロナウィルス流行により調査が叶わず、紙焼き写真による確認であることをお断りしておく。

天理大学附属天理図書館所蔵（０８１／イ４７／１（２）１～２）。二巻二冊。二三・九×一六・四糎。袋綴。外題「江戸日記上（下）」と左肩に単枠題簽。内題なし。有界一〇行（版罫紙）。上巻五〇丁、下巻六丁。印記「天理図書館蔵」。頭書あり。奥書なし。

本書中に署名は見出せないものの、日記中の記述より、小津克孝の筆だとわかる。すなわち、天保十年十二月二十二日に「川井達孝不快により、かすていらのくわしを見舞にとて為登侍る」と筆者は川井達孝なる人物へ病臥見舞いを送っていたところ、翌年一月十五日には、次の知らせが届く。

けふ未之刻頃に勢州津表より文きたりし迚告にければ、はやくもとりてひらき見るに、はからざりき、わが兄なる達孝大人の、いたづきにて去年の秋よりふし給ひしが、この早春の四日のゆふべ、なき人になり給ひしとの文也けり。

「わが兄」である津在住の川井達孝が一月四日に死去したという。川井家の詳細は未詳であるが、小津家に残る『家譜』中「略系譜」の克孝の項には、「本生川井甚四郎敬政次男。天保八年丁酉正月廿八日、入家小津新蔵。同年八月晦日為聟養子」とあるため、この川井達孝は小津克孝の実兄とみて間違いないだろう。また天保十一年一月三日に豆撒を行った際、「夫よりしてとし数豆をとるに、廿三粒を喰ふ。すなはち今歳加寿して廿二才になりぬ」とあり、文政二年生の克孝は天保十一年に数えで二十二歳であるため、記述と齟齬しない。以上により、本書は小津克孝の筆と断定できる。あらためて小津克孝の略歴を記すと、以下とおり。

小津克孝。幼名善三郎、名敬之（よしゆき）、のち克孝。通称善三郎、のち忠三郎・新兵衛。号静窓・蜂窓、別号に狗子庵・黄花園など。法号舜誉克孝居士。文政二年（一八一九）四月十日生、文久三年（一八六三）四月十七日没、四十五歳。伊勢国津の川井甚四郎の次男で、天保八年正月二十八日に松坂の小津与右衛門家に入家し、同八月晦日に小津久足の伯父守良の女ゐのを妻とし、久足の養子となった。安政元年（一八五四）三月に七代目として家督を相続する。

以上を踏まえて『江戸日記』の性格を述べると、天保八年に小津久足の養子となった克孝が、天保十年冬に主人代として松坂から江戸店に赴き、滞在した折の見聞日録となる。起筆の天保十年十一月十五日に「未之刻頃より旅之路用の算用をなしぬ」と旅費を精算し、「こよひはゆる〳〵といこひて、いと嬉しくね安くて、よくねぶる」と旅宿でない寝床を喜んでおり、かつ当日と翌日に「無事の祝詞」を述べに多くの者が来訪しているため、おそらく克孝は十四日に江戸店に到着して、その翌日から記録をはじめたと思しい。

また、天保十一年二月七日に記録が終わることから、本書執筆の動機が推察される。克孝の養父久足は、天保十一年一月二十八日に松坂を出立し、同年二月八日に江戸店に着く（『関東日記』）。つまり久足の江戸店到着の前日まで、『江

戸日記』は記されていたことになり、本書が小津久足の紀行文の一群とともに、現在、天理大学附属天理図書館に収ることを鑑みても、久足から、江戸店滞在中の記録を残すよう指示されていた可能性が高い。

さらに、やはり克孝筆の小津家『家譜』の筆跡と本書を参照すると、以前、拙稿「小津久足「陸奥日記」について」(『語文研究』九八、二〇〇四。のち『小津久足の文事』ぺりかん社、二〇一六、所収)において筆写者未詳とした慶應義塾大学文学部古文書室所蔵の『陸奥日記』(天保十一年)は、克孝の転写であると考えられる。慶大本『陸奥日記』には、久足筆の付箋が貼られているため、道中記、草稿を経て完成した浄書本『陸奥日記』を、克孝が転写し、その複本に久足が付箋したとわかる。慶應義塾大学には他に、久足紀行文『御嶽の枝折』(天保元年)『青葉日記』(天保十三年)『難波日記』(弘化四年)の転写本が残り、とくに『青葉日記』の表紙は、『陸奥日記』と同じく兎菱をあしらった意匠となっており、これらも克孝の手に成ると考えられる。そして当然、みずから転写したもののみならず、他の久足紀行文にも目を通していたと考えるのが自然であろう。

そうしてみると、その克明な記録と詳細な描写は久足紀行文を彷彿とさせる筆致であり、ただ家業のみならず、文事においても養父に倣う克孝の姿勢をみてとることができる。そもそも克孝は、その文雅の才を買われて養子に迎えられた節があり、『家譜』には、次のような一紙が貼り付けられている。原漢文を書き下して示す。

因に言ふ。文政七年申七月六歳の秋、初て手習御家流信藤貞仲先生に入門、之を学ぶ。同八年酉七月七歳の秋、読書も又貞仲大人に学ぶ。同十年亥正月九歳の春、謡喜多流岩尾先生〔清作と称す〕に稽古す。同十二年丑正月十一歳の春、乱舞を稽古す。天保元年寅の秋十二才、算術を学ぶ。同三年辰五月廿六日十四歳の夏、乱舞を江戸喜多先生〔六平太と称す〕に誓詞入門を為す。同年秋八月、庸軒流海津尚斉に茶を学び、同五年午正月十六歳の春、竹坡先生〔梅川村、貞蔵〕に入門す。而して『左氏伝』『十八史略』及び『史記』『前後漢書』『歴史綱鑑』等を学読す。天保七年申二月廿五日、京都儒学中邨先生〔安右衛門と称す〕に入門寓居を為す。此の中、千家表流萩野先生〔七郎左衛門と称す〕に茶事を習ふ。同年七月帰津。此の冬、亀山藩小川先生〔松兵衛と称す〕に又千家流の茶を習ふ。同冬村上先生〔重蔵と称す〕に未生流の挿花稽古を為す。書は十六歳の春より当冬に至て暇日毎に勝見右膳の墨風を習ふ。

名は克孝、字は子慎、静窓と号す。又蜂窓、一に狗子庵と号し、黄花園と号す。又一号、養正堂、適斉、獣斉と曰ふ。初め名は敬之、字は何香、竹甫と号す。別に木華亭と号く。花押孝の一字、左の如し。(花押)

若年より多くの教養を身につけたことが知れるが、一方で一芸に秀でない感もある。この稽古習練により名を成そうとしたのではなく、みずから愉しむ技能を身につけたというべきで、それは『江戸日記』の流麗な筆跡と的確な書きぶりに生きている。

残念ながら、『江戸日記』以外に克孝の日記・紀行の類は確認できないが、「此頃をこたりし日記など書写して」(十二月九日)「此頃怠たりし日記など書しるして」(十二月二十八日)「けふは怠りし日記など書つゞり居たりしに」(一月十八日)「此頃怠りし日記書つゞり」(一月晦日)と、本書は「怠たり」によってときに数日分まとめて記録している様子がうかがえるため、久足のように、記録を留める内発的な動機は持っていなかったようである。またそれは『江戸日記』が久足の意向によって記された証左ともなるだろう。

しかし右のような執筆の背景は、結果的に良い方向に作用したようである。久足は自身の紀行文において、基本的に生業のことは書き記さない。『陸奥日記』は、天保十一年二月二十七日、江戸店を出発して松島を目指し、行きは浜街道、帰りは奥州街道を通って三月二十七日に帰着するまでの紀行であり、その旅程には、「湯浅屋にとって重要な意味を持つ銚子周辺および東北地方の現状を自分の眼で見て確かめようとする、商家の当主としての意識が働いていた」(青柳周一「一九世紀の商人・旅行者としての小津久足」『小津久足　陸奥日記』東北文化資料叢書第十一集、二〇一八)ことは疑いないものの、商用の記述は、最小限に留められている。実際は商用にかこつけて行った旅でも、生業と文事を分けるという意識がつよく働いているためである。しかし克孝の『江戸日記』は、久足紀行に倣って克明な記録を旨としつつ、その対象は物見遊山にかぎらず、日常の些事から商用の詳細におよび、その結果、天保末年における深川の様子、また干鰯問屋の生業の実際をうかがう格好の資料となっている。

また小津久足は、『南総里見八犬伝』九輯中帙上の四冊を四時間かからずに読み終えて、馬琴から「扨々御敏速之御事、駭嘆仕候」(天保七年二月二日・桂窓宛馬琴書簡)と驚かれたほどの速読を誇るが(拙稿「小津桂窓の「神速」読

書術」『雅俗』二〇、二〇二一）、『江戸日記』において克孝は、馬琴読本『椿説弓張月』『三七全伝南柯夢』『昔語質屋庫』、また実録『護国女太平記』や歌舞伎台帳『其往昔恋江戸染』を幾日もかけて読む。こちらの方が、当代一般の読書の様をうかがうには適当であろう。日々、商用に従事しながらも、江戸店の奉公人とは異なる、主家の余裕のある日常が垣間見える。

さらに久足紀行文では辛辣な物言いと脱線的ともいえる述懐が特徴的なのだが、『江戸日記』は、詳細ながら穏当な筆遣いに終始しており、克孝の温和な性格を思わせるとともに、比較によって久足紀行文の特色をも浮かび上がらせる。

文学・歴史学をはじめ、様々な分野での活用が望まれる資料である。

（追記）

天保十年十二月十七日の浅草参詣の記述は、斎藤月岑『東都歳事記』（天保九年刊）を利用していることが判明した。さらに天保十一年一月十日の江戸城の描写は、戸田茂睡による地誌『紫の一本』（天和二年成）を、また同十二日の梅屋敷の描写も、菊岡沾涼による地誌『江戸砂子』（享保十七年成）を利用している。当該箇所はいずれも語彙・文体が異なるため引用と知れたが、文中に出典は明記していない。『江戸日記』の他の書きぶりは統一感のある文体であるため、この無断引用をもってすべての記述に疑いの目を向けるのは早計であるが、とくに物見遊山の記事は慎重な検討が必要である。

（菱岡憲司）

凡例

一、天理大学附属天理図書館所蔵本（天理大学附属天理図書館本翻刻第一三六六号）を底本とした。
一、読解の便を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧を施し、日付の変わる際、一行の空白を空けた。
一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。
一、見消・挿入等の訂正箇所は、訂正後の表記を翻字した。
一、踊り字の「ゝ」「〻」「〳〵」は底本のままとした。
一、割注は〔　〕により示した。
一、本文に誤りが認められる場合も底本のままとし、当該文字右脇に（　）を用いて注記した。
一、頭書は対応する箇所に【　】で示した。

（外題）「江戸日記　上」

十一月十五日。快晴也。朝はやくおきいづる。けふは何くれと忙ケ敷、挟箱てふものを片付などする程に午之時にもなりぬ。けふは三日にて、礼に誰かれもきて安着の祝詞述たり。別家中之内義達四人と盃ありて酒肴出たり。いろ〳〵馳走あり。なか〳〵に事おゝくて何事も思ふにまかせず。朝の程は鎮守の稲荷明神をおがみ侍りぬ。未之刻頃より旅之路用の算用をなしぬ。いろ〳〵ものおゝくて、日くるゝ頃なし果たり。暮により伊助殿方へ馳走に行て、酒肴てふじ出せり。もてなしねもごろ也。戌の刻、則店に帰りぬ。けふはかみゆひ、浴室にも行ぬ。こよひはゆる〳〵といこひて、いと嬉しくね安くて、よくねぶる。けふ別家中へみやげもの配る。かねふで拾本と手製ふしのこ弐袋宛遣し申候。尤忠兵衛・善兵衛・伊助・重兵衛・藤七、五軒へ進物也。其外みやげものなし。けふまゐり候人々左にしるす。

おまさ　おいと　おゆう　おふぢ　栄助
重兵衛　平兵衛（大工棟梁）　藤七　おいし　惣兵衛
源兵衛　卯之助　彦四郎　喜兵衛　庄吉（源兵衛倅）
おはち（平兵衛妻）　弥三郎（彦四郎倅）　勘助

十六日。けふも快晴也。いと暖かし。朝はやくおきて、きのふのあまり何くれと事片付などす。けふは状日なれば故里に文しつ。およそ七通したゝめぬ。半切一巻も書て、手くたびれけり。漸に書おわれば時七ツにも近し。是よりして又もあたりのものをそこゝことなしはてぬ。けふ丁子（統）場なる喜兵衛の妻お市、惣兵衛の妻お綱など、あられのくわしを持きたりて無事の祝詞を述ぬ。此余もの なす程、日は暮たり。口中のできものおこりて、こよひは寒紅をかひにやりて、つけ侍る。斯て亥の刻半過る頃いこひぬ。

十七日。快晴つゞき也。朝の程、髪ゆひ、ふろにも入てことなす程時移りて、頓てきぬ脱かえて、伊助同道、久住の店より伝馬町なる本店へ挨拶に行ぬ。夫より帰路に川口丁なる尼屋忠兵衛隠居之宅にいたりて、昼飯にあひ侍る。酒肴抔かず〳〵出て、いと御馳走也。茶碗むし抔ありて味よし。良しばらくいろ〳〵の咄して、八ツ過頃とも思ふ頃店に帰りぬ。【細川様】朝貞押花の帳一まき、おまさどの呉申候。こは勤の内になぐさみこしらへし品也とて出しける。いと珍らし。誠に品すくなきもの也かし。斯て何くれとおぼへるもの抔雑録にしるす内、日はくれぬ。こよひ隠居衆とはなしする程、時うつりて亥の刻過ていこひ侍る。

十八日。けふも快晴なり。朝よりふみかきしたゝめぬ。けふはなすこともなし。くさ〴〵のことに日をくらしつ。こよひは毎月百万遍のよなれば、本誓寺の老僧きたりて大念仏あり。われも珠数をくり侍る。こはこのとし春の頃漁事なく、故におこなふところにして、もとも先祖の待夜なれば也。六字の名号之軸をかける。此軸バンズイ上人の筆にして尊ふとし。年齢は百余歳にもなりぬよし。是おはりていこふ程、治助の親武助、安着のよろこびにきたりぬ。茶くわし抔持きたりて、いと丁寧也。こよひ彼豊助の涼炉を出して煎茶をこゝろみぬ。かくて亥の刻過ていこひ侍る。こよひ七ツ過とも思ふ頃ふとめざめぬに、鐘の音きこへけり。こは火事也と思ひしかども、とおきよしにてさわがず。朝おきてきゝしに、凡小一里も隔りける本目といふところなりとぞ。尤纔の出火也。

十九日。朝まだきの頃時雨あり。其後すこしくもる。巳の刻前より晴わたりぬ。けふは状日なれば故郷に文しつ。これにて時刻やゝうつり侍る。八ツ過より伊助殿と共に寺まゐりしつ。称名院によりて和尚にあひぬ。是より銚子場なる惣兵衛方へ行、又喜兵衛方へも行ぬ。なを又、水戸屋・橋本へもまわり、中島町なる重兵衛方へ行、是より江川場の彦四郎かたへ立寄て、しるこにもてなさる。かくて申の刻半過るころ店に帰りぬ。扨何くれとことなす程、夜になりぬ。こよひ五ツ過るころ、鐘なりてければ、櫓に登りてみれば火事也。ところは亀井戸の近辺、入江町あたりの出火なりと也。およそ四ツ頃にしづまりぬ。わづかの火事也。頓ていこひ侍る。

廿日。日よし。さむし。店に出て侍る。けふ重兵衛隠居、『弓張月』の本持きたりてかり置。こは馬琴の作にしてよし。漸く一冊よみたり。けふは旅の疲にや、こゝちあしく、何となく気むづかしく侍る。子供等に庭の掃除抔さしづし侍る。けふは買地所の取引にて、いそがわしく見えたり。無故すみてよろこばし。こよひも亥の刻ごろにいこひぬ。

廿一日。日よし。朝の程かみゆひ、湯にも入、みづくろひなし侍る。けふ午時に善兵衛隠居の許へ忠兵衛殿同道、中飯にもてなさる。いろ〳〵の馳走・酒肴も出たり。未の刻とも思ふ頃帰り侍る。是より店にてくさ〴〵の物語す。けふも『椿説弓張月』といふふみを四冊よみたり。こよひ店にてことなす程、時移りていこひぬ。斯て九ツ半といふ頃、長兵衛といふもの、わがまくらべにきたりてねむりをさます。こは何れにか出火あれば也。櫓にあがりてみるに、余程の火事也。ところは八丁堀まつ屋橋の岸どをり也とぞ。材木屋の火事にして、かくは火之手おゝきなりといふ。されど六七軒にてしづまりぬ。まづ大事にもならで悦し。よりて又枕につきていねたり。何くれと故郷のこと抔おもひ出て心うし。

廿二日。朝まだきに時雨あり。朝よりくもりて晴やらず。けふは状日なれば故里のふみしたゝめぬ。斯て『弓張月』一冊よみたり。夫より善兵衛同道、道具屋向を見まわし、万古作の急須ひとつもとめたり。北新堀なる野田屋平吉にて、きぬばつちをあつらへ侍る。白木屋へ行て、火事の装束をいろ〳〵見てかひとゝのへぬ。唐機の袴も一下こしらへ侍る。こゝにて時のうつること三時にも過ぬべし。伝兵衛といふうり子にてもてなしあり。酒肴抔出しける。吸物に玉子あり。硯蓋にふな・かずのこ・するめの三種あり。其余あま鯛の焼もの也。うなぎの蒲焼にて茶漬を出しぬ。いとあつきもてなし也。こゝを出しころは申の刻過たり。是より四日市なる紀伊国やに入て、きせる弐本をあつらへて、頓て店に帰り侍る。けふ白木屋にてもらひきしくわし抔を出して茶をのみぬ。故郷より文つきてひらきみる。こはしたゝめし跡なれば追啓にしたゝめて、後のたよりにと申遣ける。こよひ店に出てものなす。かくて亥の刻頃にふしぬ。子の半、丑の刻まへとも思ふ頃、ハン鐘なりたり。こは下谷通辺に出火ありとぞ。されどおきもやらでふしおりぬ。いと心さむしくてねぐるし。とき〴〵に夢覚ても

のなど思ひ出ける。寅の刻まへめざめてきくに、雨の音はげし。

廿三日。起出るに雨ふりぬ。辰の半刻ごろにふりやみたり。けふはなすこともなく、ひねもす店に出侍る。『弓張月』のふみなど三巻ばかりもよみたり。こよひもゆる〳〵いこひぬ。

廿四日。日よし。余程風ありてさむし。午之刻過る頃、竹川政寿ぬし本所へ用向ありとて立よらる。種々〳〵噺あり。連歌抔出されて白檀せられたり。茶くわしにてもてなし、やがて帰らる。斯て八ツ半頃に金助きたりて、廿八日に帰国するよしいえり。店にてことなすほど時うつりて、こよひ亥の刻頃にふしぬ。さて丑の半刻とも思ふ頃ふとめざみしが、胸せまりいとせつなく、しばし心をしづめしかどもやまず。あまりの事にいかゞなしけんといぶかしみ、やゝおきたりしが、猶しづまらず。よりて夜ばんなし侍る惣太郎をよびて湯をこひ、ウニカウロの細末を服したり。惣太郎には脊をさすらしたり。頓て又此くすりを今一たび服しける。斯て時うつりていこひ侍る。くさきいき口より出て、いと心ちあしくねぐるしかりしも、うつ〳〵として、よはなるゝ頃いねぶりぬ。

廿五日。日よし。めざみしが辰の半刻頃也。よべのけしきいまだ胸にあれど、さほどにも覚ずしてよろこばし。けふはものにひかへて用心なし侍る。金助に言伝するもの何くれとこゝろがまへす。けふも店にて勤居たり。『弓張月』の本三冊よみたり。是にて後扁（ママ）よみおはりぬ。こよひ時移りていこひぬ。きのふのこゝち、はやよくしてよろこばし。

廿六日。日よし。風あらし。冬のけしき顕然たり。朝の程に竹川政孝ぬしとひきたり。けふは状日なれば文したゝめ侍る。店にて物なすうち日はくれぬ。頓ていこひぬ。

廿七日。快晴也。朝はやく起て髪結侍りぬ。金助ははやくきて大人参を松坂へ言伝す。また、くわなへも文したゝめ遣しぬ。是よりして四ツ前頃より角力をみにものす。こは善兵衛隠居、惣太郎を供にしつ。頓て本所なる回向院にいたりぬ。かくて小島といふ茶屋をたのみて角力小屋に入ぬ。もはや始りて数番すみける也。上のさじきに座をしむる。先其あたりを詠るに、凡さじき数上下（ウヘシタ）にありて、弐百間もあらん。一段かみに寺社奉行の改さじきあり。土場又広し。みるうち人ねがらへになりける。およそけふの人五千人もあらんといえり。いと賑々敷て目をおどろかせり。土俵之柱の所に年寄とてかまへ居る。こは浦風何がし・雷何がし・源氏山何がし・追手風何がし等也。いと厳重にかまえられたり。扨木戸札は壱人に弐匁五分宛なりといえり。さじきはけふの所にては凡壱両弐分もいたしけん。われ居しさじき八人詰なれば、ひとり三朱にもあたりけんとおもはる。そはしかとはさだめがたし。すし・むすびなどにていさゝか腹をこやす。われみしところの力者こゝにしるす。尤けふは五日目也。

陸奥みちのく　十番上

岩陰　名みえず
七本鎗　八番上
岩木川　十二番上
鷺ヶ関　九番上
松ヶ崎　十番上
荒汐　三番上
高見山　三番上
総ヶ関　三バン上
都山　三バン上
大江山　同組
嵐山
陸ノ岡　みえず
浪ノ音　四番上
岩井川
武蔵野　八バン上
荒灘　三番上
乱杭
矢筈山　名みえず
兜山　二バン上
桂野　七バン上

若竹
緑野　預り
荻山
相引
車牛
鏡山
八島潟
霞ヶ浦
立ヶ島
岩熊　預り
杉ノ森
男山　三番上
岩ヶ瀬
若柳
君ヶ嶽　二バン上
黒柳
松ヶ島
大浜　一番上　預り
荒井崎
七々滝
門
鼓ヶ瀧

十七返シコト真鷺　五番上

鶴ヶ嶽　一バン上　佐渡ヶ嶽
滝ノ音　六番上　黒雲
縄張　荒馬　四バン上　引分
荒飛　名みえず　千代ヶ嶽
山巡り　同組　四明ヶ嶽
小柳　鷲ヶ浜　六バン上
鏡岩　一バン上　黒岩
千田川　濃錦里コト　不知火　六番上
手柄山　四番上　鱚野上
此所にて中入ニ成
天秤　二バン上　四ツヶ浜
松ヶ枝　浪ノ戸　名みえず
和田ノ浦　四バン上　島田川
大鳴戸　三番上　伊勢ノ浦
岩ヶ根　総角あげまき　名みえず
樊噲　国見山　名みえず
温海嶽　大岩　名みえず
重石　名みえず　筑波根
此所にて明日取組の披露あり。左にしるす。

六日目（方印）

玉ヶ橋　越の海　四明ヶ嶽
荒飛　相生　小柳
小松山　黒岩　荒馬
十万ノ海　千田川　鍔石
天津風　鱚ノ上　不知火
山巡り　平石　鏡岩
鷲ヶ浜　稲妻
手柄山　三ツ鱗

要石　房ノ海　二バン上
相生　二番上　玉ヶ橋　水入引分
十万ノ海　六バン上　大蛇潟
三ツ鱗　天津風　六番上　水入引分
以上四拾三番

およそ打出し頃、七ツ半頃也。店に帰りしはたそがれにも及びたり。こよひ酉の刻少し過しと思ふ頃、俄に鐘つくおと聞えり。扨は火事ならんと櫓に登りみるに、其火いと高くて恐ろしきけしき也。われもこをみんとて重助を供にしつ、永代橋をわたり行々に、呉服橋之内なる秋元何がし殿の御屋敷より出し火也。松平伊豆守殿も御類焼におよびしといふ。いとさわがしき事也かし。戌の半刻、店に帰りぬ。亥の刻頃に火はしづまりたり。まづ大火にもならでよし。こよひ故郷の文つきてひらきしが、一しなの注文ありて、これも金助にたのみぬ。こは味噌也。すなはち中条の店にもたし遣したり。是より程なくやすみ侍りぬ。

廿八日。快晴也。さむし。朝とくおきて神々を拝し奉る。けふは店にゐて何くれとことなす。頓て湯にも入ぬ。こよひもいづくにか火事あり。亥の刻過ていこひたり。

廿九日。快晴。朝とくおきいづる。けふは状日なれば、まづ状をしたゝめけり。是より本誓寺にまうづ。こは徳庵浄謙居士之日なれば也。且は祥月にあたれる也。かくて誂(誂)子場に行てことなす。店にて用事をなす。こよひもはやくいこひ侍りぬ。九ツ過にめざみしに、神田辺に出火ありしが、程なくしづまりしとぞ。

三十日。日よし。朝より何くれと店にて手伝え居たり。【葺(ママ)場町之不動明王へ参詣す。こは常にもいとにぎはゝし。まうづる人絶るひまなし。いとあらたか也。こは下総之成田山之うつし成とぞ。】午之刻過て次助を供にしつ、まづ日本橋なる青物町丸上といふ袋物舎に入て、いろ〳〵のものをみる。こは家名を伊勢屋又吉といえり。こゝにて袋物をかひとゝのへつゝ、四日市なる松本屋市右衛門にて印顆を銚え、夫より紀伊国屋長右衛門にてきせるをかふ。是より先、北新堀之野田屋平吉にて脚絆之類をたのみたり。又四日市より青物町に行て、かの丸上に入て、かのとゝのへ置たりし品をうけとりつ。日もくれぬれば炉灯をかりて、善兵衛隠居同道、店に帰りぬ。扨書付を取落しければ、惣太郎を丸上に遣して其よしをつぐ。こよひふみ見る程夜はふけて、丑之刻とも思ふ頃いこひ侍りぬ。深夜のさまいとさびしくてねぐるし。

十二月朔日。快晴也。風ふきてさむし。けふは例よりもはやく起出て神仏をお

がみ奉る。朝よりゆあみし、又くしけづりなどしてものと丶のふ程、重兵衛が『八犬伝』第九輯三十三巻をもてきたり。こは昨日発板也といふ。いとめづらし(ママ)てよろこばし。されどみるまもなく、かねて芝居をみんとていそがしければ、預り置つ。忠兵衛隠居・藤吉を供にしつ、葺屋町なる中菊屋といふ茶舎へ向、出侍る。則、竹川政寿・国府信親もきてゐらる。供には由兵衛といふおのこ付添たり。是より小屋に入て高土間に座をしむる。木戸場のものきたりて挨拶す。こは忠兵衛殿のしる人也。芝居もいとにぎは丶し。はじめし頃五ツ過とも思ふ頃也。あらまし・役割爰にしるす。

「太平入舟篠塚」といふ外題也

乙女之前御社参より狂心之段
今川館之段より御勅使入来御能之段
富士平道成寺タテ之幕
仲秋閑居遊戯之所、荒川蔵人忠義之段
今川閑居へ山名弾正入来之所、大道寺且久忠死之段
富士平住居之段、仇討伐之幕
是より芸事(ゲイゴト)踊之段、浄留理出語之幕

釣舟之三次　中村歌右衛門　白酒売亀六　市村羽左衛門
すしうり　坂東彦三郎　芸者妻吉(ケイセイ)　東路歟　坂東秀歌
けいせい浮島　中村かをる　右にてつとむ　其名対色人と云
以上七幕なり

大道寺新左衛門且久　坂東彦三郎
片桐斎蔵勝義〇戸田主税之助　二やく　市川八百蔵
仲秋之かしづき紅葉　中村歌をる
岩渕荒五郎　浅尾奥山
泰範かしづき三保浦　中村歌世
茶道珍好　関歌助
大膳女房早百合　うつのやとも云　惣領甚六
日野中将時光卿　坂東佐十郎
山名弾正時氏〇戸田大膳　中村芝十郎
今川之後室関之戸　小佐川常世
典楽満義院　関十蔵
乙女之前乳人柏木　坂東かてふ
藤平妹深雪　吾妻橋之助
今川次郎之介泰範　小川吉太郎
浜名之息女乙女之姫　坂東しうか
今川いよ之助仲秋　市村家橘
荒川蔵人実は篠塚いが之守〇同僕富士平　中村歌右衛門

まづあらましに書した丶めぬ。こ丶に十七人を抜出せり。此余かず〳〵の役者あれども略し侍りぬ。いと面白し。凡暮過半ともなりぬころに打出せり。是より中菊屋へかえりて酒飯をと丶のふに、八蔵とやらいふものきたりてものなどいふ。いとさわがし。もとも竹川之おのこ、酒をこのむ事甚し。五ツ半過に店に帰りつきぬ。いとよろこばし。店にてけふの噺をしていこひ侍りぬ。扨聞、けふ午時頃に新宿といふところに出火ありて、飛火所々へうつり、四所にもなりぬといふ。誠ににぎは丶しき事也とぞ。七ツ半頃に火は鎮りしと也。増上寺之御火消も御出番ありと也。しかしわれは芝居にてそをしらず。

二日。日よし。空冴わたるけしきいとさむし。巳の刻過に雪ふり初たり。つもる程にもなし。先ことしの初雪也。けふは我亡父之忌日なれば、寺にまうでて香花を手向などす。かくて店に帰り、状日なれば文した丶めぬ。是をはりて『八犬伝』をよむ。其程に夜にもなりぬ。こよひ酉の四刻、寒に入といふ。暦にみえたり。なをけふはきの(甲)へ子【十二月二日甲子】にて、店には大黒天之像を画し軸をかけ、茶飯に大根抔をそなへまつる也。われも祈念し奉る。けふはいとよき吉日也。天赦万よしといえり。是よりして日記など書認めて、こよひ亥の刻半にいね侍る。

三日。日よし。けふは少しく朝寝したり。こはよんべ丑三とも思ふころ、わが居間と蔵のあはひなる所へ既に盗賊込入て、そのあしおと両三人にもおよびたり。ふとめざめしに、こはあやしと思ひしかば、しばらく其体をうかゞふに、先にぐる道を拵らゆるとみえて、かの木戸口の錠前をねぢんとする也。よりて夜番に其よしいへば、二階なるやぐらに登り、「誰ならん」といふに、声せず。そが程に自身番より俄にはしりきたりて金棒をならし、蔵之ほとりをまわりて帰りきたり、表之戸をた丶き、「蔵之あはひにやうこそあれ」と告るに、ます

〳〵驚きて皆起出て、棒ふりまわし、既に追んとするに、先戸をひらき、炉灯出してあたりをみるに、是ぞと思ふかげもなし。唯錠前之下にふるきくぎ抜壱丁落たり。盗人はかの自身番之つげしひまにとく逃れしならん、其程足音せり。扨も危き事也。既に入らんとする時、よくも聞付て、よしことなく済てよろこばし。【けふ風のふく事まことにはげし。わが身にはよくしめてさむし。】斯て又寝に、皆々あさゐし侍る。されど辰の刻はすぎず起出て、何くれと用事なし果つ。けふは『八犬伝』をよみ侍る。こは新板なれば、はやくよみ終りてかえしたく、頓てのこらずよみつくしたり。されば時うつり日もくれぬ。こよひも物語していこひ侍る。【こよひ百万遍あり。こは十八日之夜に行ふところなれど、其頃は事しげゝれば、はやくをこなひ果し也。】こよひ寅之刻頃に撞鐘の音いとさわがし。こは火事也と思ひしが、とおきよしにてふしおりぬ。牛込あたりの出火なりとぞ。頓てしづまりしと也。

四日。快晴也。何角こゝろ覚えを書したゝめ、髪ゆひ抔して店に居たり。午時後にいたり、こゝち不面白、唯黙然となし侍るのみ、なにごとも好しからず。日くるゝにおよぶほど、ます〳〵はげし。是はと心得、しばし得たへず。ふとんを布(シカ)し、夜着をきていねたりしが、又(マタ)さむくて、又其上にふとん三ツ四つかさねてきたり。のどはれてもの呑込にいたし。頭痛つよくして、頭に稲光のするごとし。身はほとり、肩さむく、足はだるくてちぎるゝごとく、更に物をかへす心持せり。誠にせつなくてたまらず、いと〳〵こゝちあしくなりぬ。あまりのことにあきれはて、先わが持きし煎薬弐帖をもちひぬ。けふも風のいとはげしく、身にしみてさむき事甚し。こよひ亥刻過て、医師成田養順といふ人きたりて脉をみる。斯て直様かえらる。是より其人之主斎を服用すること弐服也。こよひは得いこひねむらずして夜はあけたり。

五日。日よし。起てみるに池水氷て板のごとし。夜べのさむさしられたり。けふも風のふく事甚し。よべのこゝちあしく、得をきもやらず、ひねもすいね侍りぬ。むねぐるしき心持たぐえんに物なかるべし。彼成田老人みまゐにきたれり。こよひもうつ〳〵としてねぶりもやらず。丑之刻とも思ふ頃出火あり。こは上野のかたにあたりて、とおきよしにてさわがず。夫よりすこしくねむりしや、夜の明るをしらず。

六日。けふも快晴也。風の音はげし。けふも得起もやらず。故里之状日なれど、それさへできず、心ちあしく侍りぬ。成田老人、けふも見舞にみえたり。けふはよく熟眠せり。こはきのふ・一昨日の疲なれば也。こよひもうつ〳〵とす。扨もこよひは煤取之掃除にて、丑之刻頃よりみな〳〵目をさまし、店・仲之間、何れもそうじをなす。則あづき粥に餅を入て煮るが例なれば、是をわれもくらひたり。夫より良ねむりしが、夜はほの〴〵になりにけり。

七日。朝まだきに雪ふる。いとさむし。いまだ病にておきもやらず、ふしおりぬ。けふは煤取之掃除にてめでたし。けふも終日寝居て心ぐるし。『弓張月』之本五巻よみたり。こよひ重兵衛、大御所様より此度近衛様へ上りし菓子なりとて、そを頂戴す。こはもちひぐわし也。かくてふみ見る程、時移りてやゝねむりにつきぬ。子の刻過、丑之刻前ともいふ頃、出火あり。こは田舎辺のよし。されど鐘はつきたり。よるは何かとねぐるしく、故郷之ことなど座にゆかし(ママ)く(ママ)心ちぞする。

八日。日よし。風の音はせでよし。けふは巳之刻頃より起出る。とこをあげてよろこばし。けふ午之刻頃とも思ふ時、俄に出火あり。こは天(伝)奏屋敷之土蔵之焼し也とぞ。煙のみ風にふかれてそのさま恐ろしく、されど程なくしづまりてよろし。けふ医師成田養順みえて嘶をなす。脉をとりて、もはや風邪はなしといふ。されどいまだ咽之いたみさらず。去程に、ひともし頃にもなりしかば、成田氏に酒飯をてうじてもてなす。われも夕めしをくらひたり。頓て日くれて養順老人かえられたり。夫より寒中見舞之ふみ、杉原てふ紙に書したゝめて、こよひ亥の刻過てやゝねぶり侍りぬ。

九日。快晴なり。さむし。水は氷りて冬をしらする。しばし店につとめ居てものなす。夫より状日なればふみしたゝむに、いとさは也。寒気之見舞にくさ〴〵のことありて、終日状にひをくらしつ。漸に火をともして封じ果たり。斯て此頃をこたりし日記など書写して居るほど時はうつりぬ。こよひも亥の刻半とも思ふ頃ふしたり。されどいとねぐるしく、物など思ひいづる。こゝろ淋し。こよひ風静にて何より嬉し。

十日。朝とく起出る。日よく晴わたり心ちよし。風もなくて長閑なり。朝の程ふみゝる。こは『弓張月』五冊よみ侍りし也。けふは店に居て何くれと用事をなす。そが程に時移りて夜にもなれば、いろ〳〵のはなしして、亥の刻前にいこひ侍りぬ。

十一日。快晴也。けふはいとあたゝか也。風もなく長閑やかなり。けふも店にて用事抔を手伝え侍る。こよひも亥之刻頃ふしぬ。

十二日。快晴にして、きのふにをなじく暖か也。風もなくてよし。状日なれば何くれとふみしたゝめつ。なす程に日くれたり。こよひ店にて用事をなしはてゝ、夫より歌書抔ながめて、子之刻とも思ふ時いこひ侍りぬ。

十三日。日よし。午時後、風出たり。けふは朝はやくより店にて、売仕切之帳面突合にかゝる。こは店勘定之用意也。終日これに時をうつす。午之刻過に半鐘の音なせり。そはいづくにか出火あるとしられたり。されどみもゆかず。斯てけふは仏日なれば本誓寺にまうで、称名院にいたりて、おがみなしはて帰り侍りぬ。帰路に佐賀丁なる船橋屋といふに入てくわし抔をみるに、あしらひあしければ、かひもせでかへりたり。夫よりも猶、帳面に日をくらし、こよひも突合に亥之刻までかゝりたり。漸に大帳九分どをり突合侍りぬ。思ひの外はやくはかどりてよろこばし。こよひ『弓張月』八巻をよみ侍りぬ。是にて不残三拾冊をよみつくしたり。いとうれしき心ち也。かくて亥の刻半過てやゝねぶりたり。

十四日。快晴也。風の音はげしく、けふは又さむし。朝のほど何くれと物かたづけ侍りて、店にて帳合之手伝えをなし侍りぬ。こよひ深川八幡宮之夜市にして、賑はしときゝてまうでつるに、いとにぎはゝし。歳之市にていろ〳〵のものをうる。〆縄・三宝抔、惣而正月にほしきものをあきなふ也。いと心ちよき夜宮之さま也。帰路に金比羅権現を拝し、いたばしをこえて、其ほとりなる楼にいたり汁粉をくらふに、八重成・小倉野・玉子雑煮抔をいだしたり。いろ〳〵にとゝのへて帰宅せり。夜風いとさむし。斯てこよひも亥之刻にふしけり。

十五日。快晴なり。朝まだきに起て神々を拝し奉る。けふはいと長閑にて心ちよし。髪ゆひ、浴室にも入て、午時後、葺場（ママ）町なる竹口喜左衛門之店に入て礼蔵ぬしをとふに、留守にて得逢ず。夫より竹川之両替店に行て挨拶をなしけるに、これも留守にて本意なし。かくて日本橋之ほとり榛原何がし、通本町二丁目丸角屋之店、四日市きのくにや抔を買物に歩行て店にかえり侍りぬ。是より夜にいり、いろ〳〵のことなしていこひ侍りぬ。

十六日。快晴なり。けふはあたゝか也。東都雑録をしたゝめて、状日なればふみしたゝめ侍る。是にて時うつり、こよひも例のごとくいこひたり。荒風にてねぐるし。【けふ竹口礼蔵尋きたり、しばし噺してかへりぬ。】

十七日。日よし。風荒し。されど寒気は和らぎて凌安かり。けふは朝より髪ゆひ、浴室にも入て、『恋江戸染』といふ本をよみたりして、夫より朝（ママ）草へ詣でんとす。午ノ刻より店を出て、まづ本所よりして小梅といふ所にいたり昼飯をとゝのふ。こは小倉庵といふ茶屋也。こゝにて汁粉めし抔をくひて支度をなしたり。こゝはいと風流なる庵にて、けしき面白し。源兵衛堀といふ堀、目のあたりにして却而みやびたり。是より又吾妻橋までかえりきて橋をわたり、浅草観世音にまうづ。まづ三社権現にて十二銅を奉りて拝し奉る。夫より本堂にいたりて拝するに、群集おびたゞしくして堂内いとせばく、すゝみがたし。中々境内の群衆いはんはなか〳〵おろか也。又、今明日、市店多（ママ）くよしにて、其店の数甚し。新年之儲け也とぞ。注連飾りの具・庖厨の雑器・破魔弓・手鞠・羽子板等之手遊び、其余種々之祝器をならべ、售ふ声は巷にかまびすしく、都鄙の詣人、是をもとむるを恒例とし、陰晴をきらはず群集すること、更に昼夜之わかちなしと也。大路に駢闐（ベンテン）して東西に道を分けかね、縦横に目も配りがたし。又裏手之方は山の宿・砂利場に満て夥し。此日、吉原之にぎはひもおびたゞしくて、いふも更也とぞ。境内之人、実にはかりがたし。広大の市也けり。帰路には本門より出て浅草通かえりきて、両国なる楊弓屋に入て小弓をなぐさみ、日くるゝ頃、店にかへりぬ。こゝにいふ、ようきう屋之娘、粧ひをなし、店に居るを例とし、絶ておのこなし。唯女のみひとり也。此女よくものいふ事甚し。まづ客に煙草抔を吸つけわたし抔して、能ことを行ふ。是表に楊弓の店をなし、内におのこをツルの女也けりと、そゞろに恐ろしきこゝちぞする。是より店にて噺

をなして時移り、故里よりきしふみなどひらきみて、こよひも亥之刻すぎていこひぬ。風のおと烈しくて胸ぐるしきこゝちぞする。

十八日。快晴也。朝より店にていろ〳〵のことをなし、四ツ時頃より、ふみしたゝめにかゝる。こは若林・川井抔へ遣し侍るふみ也。けふ認めおきて、あす出さんと思ふ也。是にて時うつり、なすこともなく亥之刻にもなりたり。是より店に出てみるに、出船ありとていそがわし。送り状・買仕切抔之したゝめに他念なし。こよひ子之刻過ていこひ侍りぬ。【こよひ丑之刻頃、木場に出火あり。はやく鎮りしとぞ。】

十九日。快晴也。風はあらくふけど暖か也。朝よりふみかきしたゝめて、店に出て手伝たり。けふは仏日にして、本誓寺にまうづ。終日店にていろ〳〵のことをなす。よに入て、此頃怠たりし日記など書しるして、亥之刻過にいこひたり。

廿日。日よし。あたゝか也。今朝まだきに八兵衛は地廻りの掛方にいで行ぬ。終日店にて用事をなす。こよひ『其往昔恋江戸染』といふふみゝて、子之刻とも思ふ頃ねぶりぬ。

廿一日。快晴也。朝より店にて売仕切之寄算抔を手伝侍る。午時後、茅場町、鳳湖堂より万町襲玉堂江ものなどかひにゆきぬ。けふは上様御出駕にて、町により往来をとめらる。いとそなへ厳重也。さすがに御威光かしこくもいはん方なし。店にかへりし頃は申之刻なり。夫より四方八方之はなしに時過て、こよひもなすこともなくふみなど弐通書しるし、『恋江戸染』といふを弐冊よみて、亥の刻半にねぶりにつきぬ。

廿二日。快晴にてよし。けふは状日なれば、朝よりふみを沢山に書したゝめぬ。是にて時刻はやゝうつりて寸暇なし。漸にすこし手をやすむる隙こそなし。よりて日もくれかゝりたり。もとも川井達孝不快により、かすていらのくわしを見舞にとて為登侍る。是にて旁いそがわし。酉の中刻、ことすみて大坂屋にわたす。こよひ何くれとこと繁多にして、亥之刻やゝ過る頃やすむ。風いとはげしくねむり兼たり。

廿三日。曇天なり。雨はふらず。朝より店にて用事なし侍る。けふもふみ三通書したゝめ、くさ〴〵のことに日もくれぬ。夕つかたすこし雨ふる。こよひ本よみていこひぬ。風ことにあらし。

廿四日。日よし。風大にあらし。けふは仕返状日にして、いそがはし。歳暮之祝義状を出す。数通書しるしていとまなし。是にて日のくるゝをしらで過ぬ。夫より店にて用事なし。例のごとくやすみぬ。こよひ寅之刻過る頃、出火あり。いとさわがし。われもをき出て見るに、火之手驚かれぬる。夜明はなるゝ頃より装束を付、火事場にいたるに、八丁堀也。殊之外の火事になりて、中ノ橋迄焼失になりぬ。わがひかへの地所も八丁堀にあり、其地所大方にやけたり。漸に三四家之長屋耳のこりたり。其余みな焼にけり。夜明て忠兵衛隠居へ行て朝飯にもてなされ、頓て五ツ前頃とも思ふころ店に帰りぬ。

廿五日。曇天めきたり。いとさむし。終日店にて用事をなす。時の移るもしらず。こよひ売仕切之惣高〆をなし終りぬ。是にて亥之刻過に成たり。斯てねぶりぬ。

廿六日。快晴也。荒風にて大にさむし。けふは髪をゆひ侍る。店にてことなし居ぬ。こよひ夕方に蕎麦之馳走あり。日ぐれより、いちがい辺に出火あり火之手みゆる。程なくきえたり。『恋江戸染』をよみていこひぬ。

廿七日。くもりがち也。さむし。けふも店にて種々のことをなす。『江戸染』十七冊のこらずよみおはりぬ。午時後、火事あり。方々にていづくともしれず。三所にありて時々鐘の音せり。こよひ夕方、八兵衛帰りたり。集金千三百五拾両計あり。先無事にてかえり、よろこばし。けふは門松・神棚、所々注連銛りにて嬉しく、二階には恵方棚をかざる。其余、土蔵のこらず、いはひそめたり。こよひも店にて噺をなし、いこひ侍りぬ。こよひ丑之刻とも思ふ頃、地震あり。誠に大キクゆすりてめざめたり。しばらく地震せり。いつねぶりしともしらで、夜明迄うまひなしたり。

廿八日。日よし。三日なれば稲荷鎮守ノ社えまうづ。けふは此頃怠りし日記書しるして、巳の刻も過たり。さすがに歳のくれにて、いといそがわし。其余、

春の用意抔にことしげく、終日諸事急ヶ敷てくらしぬ。こよひ算用をして亥之刻ねぶりぬ。

廿九日。快晴にてよし。此月は小にして、けふは大晦日也。されば行かふ人も夥敷、何くれと店世話して、午時頃迄に買物之払をなし、けふは松坂へいだす状をかずしたゝめて封じ侍りぬ。是にて時うつり、未之あゆみ程過て、申之刻にちかし。是より店にていろ〳〵のことなして夜にもなり、帳合に世話しく、諸事請払をなしぬ。こよひ亥の刻過に蕎麦切之夜食をくらひぬ。こは例年之ことなり。子之刻半過て、帳面之表紙上覆之上書をしるす。こは春十一日にしたゝむところにして、夫迄之仮上書也。数多くしてしるさゞれど、まづ金銀出入帳といふを恵方にむかひてはじめて書ぬ。夫より入船帳・売仕切、又は買分帳・売分帳抔いとおゝくかきぬ。但し半紙帳は、こよひ本上書するもあり。歳徳棚、御灯明を献じて拝礼す。丑の刻過に山屋喜八殿見えて、金子千両持参せり。こはかしてある処、こよひ返金に見えられたり。外に利金三拾両もちきたれり。こは三月の利足ならんと推せらる。至而篤実なる人にて、いとたふとまる。何かと右之礼厚之人はかくこそあらまほしけれと覚ゆる。夫より出入之帳合をわり、帳面を掛かへ、古帳をつゞらへをさめ、蔵に入ぬ。店はきそうじをなし、仲之間にて仕衣施（シキセ）の品を店中へ遣す。われも襦胖と下帯とを貰ふ。其外皆をなじ。子供等には足袋をこれにそゆる。斯する程時過て夜もふけたり。寅之刻ともをもわる。店中とし越之挨拶をなしてふしぬ。この時、七福神之宝船を画き、夫に「ながきよのとをのねぶりのみなみさめ浪のりふねの音のよきかな」としるしたる紙壱ひらを枕のもとにしきて、心ゆたかにふしたるは、いはんかたなふ、いと嬉しく、やゝしばしねぶりぬ。

天保十一といふとしの〔庚子〕正月元日。【天気晴てよし。まことに立春めきたり。】朝とくおきいでつ。まづ礼服をとゝのへて、今朝の若水にて手水なしはて、歳神棚より神棚・荒神棚・鎮守の稲荷大明神、其余拝礼之神々様の礼拝終り、仏前江御礼をのべて、夫より店中之ものと店にて屠蘇酒にて三宝にすはる。但し三宝わが国の通り也。此式すみて打揃、雑煮餅を食す。〔豆腐・人参・里芋・大根・青菜〕等之雑煮也。又重組あり。牛房・ごまめ・にまめ・こぶ巻・鮒・数のこ、いろ〳〵なり。【今朝、店中の者に礼詞をうくる。けふ大服（フクチヤ）をのむ。こは茶の中へ梅干と豆を入てのむ也。是を「ふくちや」といふて、めでたき日にはこしらへてのむこと也。】南都之客人忠兵衛主・松助主の両人にも同席にていはひ侍る。是よりして髪けづり、ゆあみなし、店に居るほど、善兵衛隠居・忠兵衛隠居も各出勤して礼詞を述る。当役伊助は善吉と子供源太郎を供にし、外に挟箱持をつれて、年始之礼まわりに出ぬ。又嘉助もをなじく惣七と子供利吉を供になし、挟箱持をつれ、是も礼に出行ぬ。斯てわれは八兵衛をつれて八幡宮にまうづ。こは氏神にして深川にあり、境内いと広し。尤護摩料を持て奉納なし侍る。神楽所にて十弐銅を献じ奉る。御本社の裏の脇に築山めきたるあり。こは年に一度が此山に登ることをゆるさるゝとぞ。夫よりをなじ境内なる住吉大明神の御やしろにまうづ。右手は堀にして小舟自由にかよふなり。又あたりには茶楼もありて、赤まへ垂のみゆるさま興あり。是よりして観音堂にまうで線香を奉る。扨境内なる軽雲亭といふ楼に入て汁粉をくふ。この時、此家の婆々年玉に纔の品を出しける。則こゝを口山といふ。御本社のうしろよりは奥山といえり。鳥居は石にして「八幡宮」といふ額かゝれり。先御府内の大社なり。もともたふとくおがみ奉る。御神馬もあり。かくて帰さ路におよぶに、このあたりの遊女めきたるもの行かふさま、上方にはこよなくおとれる。頭の姿却て下品めきたり。頓て店に帰る。囲碁抔してたのしみ侍る。こゝにいふ店の屏風、陳明の書也。是を正月三ヶ日は立まわし置也。障子も四枚鴨居へ入置也。こよひは昨夜の疲もあれば、店中はやく店を片付、戌の刻頃にみな〳〵いこひ侍りぬ。

二日。【けふ天気晴わたり、別而美晴にて、きのふにまして立春のさま、空もいと長閑也。かすみ棚引そむるもいとよし。】朝はやくおきて雑煮餅を祝ひ、夫より浴室に入、衣脱かえてわれも年礼に出ぬ。供藤吉をつれて行、伊助・嘉介もきのふの如く出行ぬ。まづわれは久住の店より伝馬町本店、夫より日本橋をわたるに、早春のさまいと賑はゝし。国府勘兵衛主の店へも礼詞に行、坂本町なる不動明王に詣づる。こは成田の不動尊の御旅屋なれど、霊験あらた也とて参詣の人絶るひまなし。是より茅場町なる竹川彦太郎主の店、竹口喜左衛門主の店へも年礼に行て、川口丁の厄屋にて馳走に呼る。とそ酒・重組にて祝儀也。斯て八丁堀なる家主喜兵衛を問て、去年焼し地面の改を見るに、いと哀なり。鉄砲洲稲荷明神にまうづ。いと大社也。表門いかめしく高餅（堀）あり、境内いとよし。

湊橋より真下にみゆる。こゝにも築山あり、乱りにはいられず、ゆるさるゝ日ありとぞ。かくて新川なる大神宮の御社にまうづ。ことしの恵方にして詣人多し。こは白木づくりにして、すべて伊勢のうつし也。葵の御紋の炉灯にて、公よりもたふとみ給ふ也。則勢州宇治なる慶光院の出張といふ。御神楽を献じて富貴延命を祈る。是より乙女ばしへ出、永代の大はしをわたり、深川中島町なる重兵衛方へより、方々をめぐりて店に帰る。又夫より伊助殿の宿へ年礼に出てもてなされ、本誓寺にまうづ。御墓へもまうで、称名院へより、こゝを出て銚子庭へ行、かへさ路に冬木丁なる何がしの庭中なる弁財天にまうづ。こは小社也。されど弁財天之御像いと大きくて恐ろしき心ちぞする。庭中はいと広し。池ありて大きし。斯ておなじ庭中なる稲荷の御やしろにもまうで帰るに、まうづる人多し。こは初巳の日なれば也。是より江川庭の彦四郎によりてもてなされ、頓て日くるゝ頃、店にかえりぬ。是にて年礼みな済てよろこばし。こよひ店にて遊び、亥の刻前に皆々ねぶりにつきぬ。

三日。美晴にて暖和也。心ちいとよろし。けふは朝より髪ゆひて雑煮をくらひ、店に出て将棋・囲碁の慰みに時うつりぬ。未の刻前に、お糸かたへ昼飯にもてなさる。いと馳走にして腹みちたり。頓てかへりて、又何くれと四方の噺して終日遊びくらし侍る。けふ朝まだきに、伊輔は東叡山両太師護摩の祈祷に詣ぬ。又八兵衛は佃島なる住吉大明神の御社へ、是もごま料を持てもうで侍りぬ。こは海上安全の御祈祷なりとぞ。こよひ寒明にして年越の夜なれば、店中打揃、豆をいはふてとしとりぬ。まづわれは手水なし、歳徳神より神棚・荒神棚・仏壇等の御前にて、めでたくもこよひ加齢の礼詞を奉りて、尚此上をいのり奉り、夫よりしてとし数豆をとるに、廿三粒を喰ふ。すなはち今歳加寿して廿二才になりぬ。【愚詠／人並に年の数のみつもりきていと恥かしき我身なりけり】神仏・父母の恵み、いと難有く、さすがに心嬉し。徳兵衛・小八は隅々へ豆をまき、「福は内、富は内」といはひ納め、門口にて「鬼は外」と大音にて呼はり、ことなく何も角も祝ひおさめぬ。故郷もこよひおなじことゝ、いと恋し床し。又囲碁抔をなぐさみ終りて、年始の祝儀状をこよひしたゝめ侍りおきぬ。こは六日の状日の用意也。【こよひ「厄はらひ」とておもてを呼はり行あり。こは伊勢の国に同じ事也。われも十二銅を出して厄をはらひ落しぬ。】是にてこよひ時過て、子の下刻ともおもふ頃ふしぬ。夜着きてねむり初れば、丑三の鐘きこえたり。

四日。快晴也。風ふきてさむし。【今日は立春也。いとのどかなれば／けふははや空のけしきものどかにてわきて春まつ心ちこそすれ】けふは朝よりこと繁く用意して、銚子場え出かけ侍る。こは高橋の傍にあり。けふは吉例之通、この庭の魚〆粕・干鰯之初市也。よりてわれも出勤なしぬ。まづ喜兵衛の内にて、けふの祝詞をのぶ。しかする程、あるじ馳走して庭の入江へ船をうかめ、われをのせて網引をなしぬ。こは「はや」といふ魚、この江に集りよるよしにて、網うち引あぐるに、その魚、大きなるは一尺もあらん、小なるは五六寸也。又名を「うごひ」ともいふとぞ。一ツのあみに三拾計づゝもかゝりて、いと興あり。漁夫は網をひき兼たり。およそ七八度の網にて百八十ばかりも数あり。そをけふの仲間え配分なしぬ。是より喜兵衛の内にて、例年之通の膳部にて馳走に呼る。中島嘉左衛門・高木源治郎抔いふ千住の賓人、初市とてきたれる。酒肴出てもてなす。其中に手をうち、「大繁昌大引合」抔と大音にてよばはり、酒の馳走あり。是を「しめます」といふ。酒盃巡りてたけなは也。かくてわれはこの席すみて、この場の鎮守稲荷大明神の御社にまうづ。こは土蔵のやしろにして、いと大社也。奉納の額は九十九里あびきの図なり。われはけふの祝詞を奉り、初市の御礼をおがみ奉りぬ。およそ未の刻過に市あり。こは仲間のもの寄合、市立する也。けふは予も、場きものとて麁衣とかへて手拭をかぶり、出てみる。賑々布ていとよろこばし。凡六千俵計の市也。七ツ時頃にすみたり。是よりきぬかへて喜兵衛の内にていこふ。主もけふの礼をあつくのぶ。其内喜兵衛、国市丸といふ御船の御鏡餅なりとて、われにあたふ。こはかしこくも、東照宮御座船の御鏡也。むかしより今に例かわることなく、いとめでたし。将軍様も御乗船はなしといえり。是をいたゞき納めて、頓て日くれて店に帰りぬ。こよひ店にて年始状の手伝をなし侍る。これに時うつりて夜はふけぬ。伊介はいまだ場より帰らず。市過て会合なし、初市相場をきはめの相談にて也。かくてこよひの用向までとゝのへ済て、九ツ半とも思ふ頃、ふしねぶりぬ。

五日。けふも天気晴れわたれり。かみゆひ、浴室にも入、身づくろひなしぬ。けふまで元日のごとく神仏に拝礼す。さてけふは江川場の初市也。よりてきのふのごとく出勤す。まづ此庭の稲荷大明神の御社にまうで、けふの礼詞を奉る。

こはいと大きなる御社也。又みやしろの右手に五社宮の御社もあり、けふの礼詞を奉る。抑此庭はむかふに長屋あり、入江のさま折曲りてあり。場の傍に栖原・水戸屋・久住、手前和泉屋・多田屋・橋本、問屋七軒の売場あり。地主を治右衛門といふ。則彦四郎の内にて、例年の酒肴にもてなさる。けふは塩屋の人、客にみゆる。頓てしばしが程時移りて市立あり。凡申の中刻也。数小二万俵もありて、銚子場とは格段にぎやかなり。売買いとさわがし。頓て日もくれば、名々家々の印のてうちんを出して市立あり。まことに初市とも思はれて、嬉しき心ちぞする。戌の刻頃、市終りぬ。是よりうりばにてきぬかえて、頓て店に帰る。まづ両場の市もさはりなく済てよろこばし。是より年始之状にいと世話しく、よふけたり。丑之刻ごろにまづやすみぬ。

六日。美晴也。いとあたゝかし。春のけしきさすがに長閑なり。けふは朝はやくより年始の状にかゝる。店にも諸方へ出す年頭状にいとことしげし。南部・仙代・上総・房州の浦々の書状より、大坂・兵庫・尾州・勢州・三州買方の書状まで、追啓ありて、誠に寸暇もなし。我も故郷状にいと世話しく、漸に日くるゝ頃したゝめ終り侍る。やがてのこらず大坂屋茂兵衛かたへもたせ遣しぬ。こよひは初市よりの草臥にて、いつもよりはやくみな〳〵寝侍りたり。【けふ日ぐれに門松をとり小松とかゆる。こよひ七種菜をはやす。いせのごとし。】

七日。日よし。風あり。朝とくより起出て、けさの菜粥をいはふ。こは菜にもちひ也。けふは人日とていはひ日也。けさ門へ三味線をひきいだきてきたる女あり。【〇梛節（ナギフシ）をうたひ、又投節（ナゲフシ）ともいふ。】こは元日よりいくどもおなじ風にてきたれり。其さま編笠をふかくし、よき風俗也。是を「鳥追」と名づけたり。鳥目をなげやれば、うけずして行ぬ。手渡しにてうくるをならはしとせり。いとをかし。午之時後、隠居衆の妻、礼にみゆる。とそ酒を出して祝儀すみぬ。おのも〳〵にとしだまを持てきたるに、其品かるからず。江戸はヶ様之ことにはでやか也。吸物一碗を出して、酒盃めぐりてことすみぬ。けふ未の刻過より小雨ふる。さすがに春雨と思へばいと淋し。くるゝまでやまず。こよひ『昔語質屋庫』といふ書をよみて、亥の刻の時の柝木打ころに、よぎ引被きてふしねぶりぬ。

八日。少しくもり空也。風いと荒し。未之刻頃に俄に風はげしくふきて驚きぬ。是よりして少し雨ふりけるが、夕つかたに霰めきたる雪にはあらぬ白きものふる。よりて此頃にひきかへて余寒いとはげし。けふはなすこともなく日をくらしたり。こよひ茅場町なる薬師如来の初御縁日にして賑やか也とき、けれど、風いよ〳〵はげしくふけば、得まふでず。こよひ雨ふれり。されば店にて囲碁をなぐさむ。やがて四ツの時になれば、ことやめてやすみぬ。こよひ亥の刻過に地震あり。よほど大きくゆりたり。故郷こひしく思ひ出てねぶり兼けり。

九日。空晴たり。風あらくふく。けふは状日なれば、ふみしたゝめ侍りぬ。数通にして時過たり。漸に午之刻後にかきつくしぬ。けふも終日あそびくらして、いろ〳〵のはなしをなし、菓子抔くふて茶をのみ、いつものごとくこよひも寝侍りぬ。

十日。快晴。朝はやくよりこゝろ用意して、上野御仏参をおがみにいづる。下谷まで行に、木戸を〆て通ることならず。こはいまだ将軍様の御出行のすまぬ故也。しばしが程、木戸の傍にたゞずみ居る。そが中に木戸明れば、上野にて所をしめて拝見す。この群聚いはんは中々おろか也。誠に錐を立る隙もなきとは是等のことやいふべし。警固の人々、十手・樅棒抔をふりまわし、いときびしくいましむる。諸侯諸士の出入、絶るひまなし。或は乗物、又は乗馬にて、其御通行の粧ひは実に治世の功也。鎗抔の沢山なる、縦横に満々たり。その内、御大老井伊掃部頭殿、つゞひて脇坂中務大輔殿御下向あり。やゝしばしする程、高松候（侯）、御装束にて御参詣あり。御左右素袍烏帽子也。其余前後白張也。こは挟箱持・草履取・馬口附・沓箱持等みなをなじ白丁也。其行粧いと見事なり。御称号を松平讃岐守殿といふ水戸斉昭（卿）郷の御兄なり。この間にも諸士の出入いと多し。駕篭に乗るゝあり、馬に乗るゝあり、或は御用之車あり、御用の物を荷ふて行あり。かくて又むかふより御装束にて参詣あるは、国主之一人、筑後柳河大守立花候（侯）なり。これもいとみごと也。其内、下座のいましめきびしく、やゝして紀州殿御下向あり。こも御装束にして、御供奉の人々多し。けふの専一見事と思はる。すこしありて尾州殿御下向あり。これは御供奉の人々上下也、装束にあらず。あまり人々押詰ていと窮屈なれば、帰らんと思ひ、下谷の方へ帰るに、有馬候（侯）いと花やかに、御装束にて親子参詣あり。こも国主の一

人、筑後久留米之大守也。この余、御旗本衆の諸士多く参詣あり。当時御若年寄の壱人、堀田摂津守殿も参詣あれど、装束にはあらず。是より神田橋見付口より御丸ノ内へ入、かしこくも御城を右にみて行々に、数千丈の石墻、いづれのたくみか削なせる青巌のかたち、三重二重の御櫓亭々とし、朝日佳気氤氳(インウン)として慶雲に映よそほひ、鯱(シヤチホコ)のうへに雛鬻の千代の春をまひあそべば、御池の汀に万歳をうたふ亀ゆふ〳〵たり。是より猶もあゆみて、虎の御門外なる京極家の御藩邸の金毘羅大権現の御社にまうづ。こは讃州丸亀之城主にして、象頭山をうつし、安置なし奉る也。故に参詣の輩、陰晴をきらわず、近鄙より出る人多し。けふは御祭日なれば、いと賑やか也。御門の内へいるゝこと容易ならず、御門外より賽銭をなぐる人多し。折能、門内へ入て手水なし、神前に於ておがみ奉るに、その群聚いはんかたなし。もとも月の十日限にて、平日は参詣することをゆるされず。漸におがみ果て、帰さ路におよぶ。こゝまで上野より一里拾丁ともいへり。いと遠し。是より銀座壱丁目の玉の井といふ茶屋に入て支度とゝのふ。こはよき家にして奇麗也。かくて申之刻過ともいふ頃に店に帰りぬ。衣脱かへ、あたりを片付抔する内に、頓て日もくれぬ。いと草臥て行灯の本にて何となくいねぶりたり。よびさまされておどろきぬ。こよひ売仕切なる帳面の突合を手伝ふ。こと果し頃、四ツ時にもなりたり。是よりふして寝るに、けふの道を思へば、およそ小三里の歩行也けり。

十一日。日よし。快晴にはあらず。けふは朝より髪結、浴室にも入て身をきよめ、巳の刻前より二階にて帳面の上書をしたゝむ。こは大晦日の夜に仮に上書なしおきたるが、けふが吉例なれば、その仮上書をとりて、改上書する事也。もともけふは蔵びらきにて、心嬉しき日也けり。生酢をつくり、いはひ侍る。されば恵方にむかひて、大帳のこらず上書なし終りぬ。凡一時あまりも費へぬ。是より紐付て、店へめでたく掛粧りし也。能出来しとて誉るゝもうれし。こよひ故郷のふみしたゝむ。こは明日が状日なれど、梅みにゆかんのこゝろあれば、こよひより用意して、あすのたすけになしける也。店にて碁をうち慰みて、頓てふしどに入侍る。【こよひ亥の刻より雨ふり出たり。】

十二日。快晴也。よべの雨はよき程の潤なりけん、庭の面いまだかはかず庭たずみせり。けふは心がまへして、吉三郎を伴ひて外に出づる。この人は野州栃木のもの也。釜屋新助の倅にして、此頃店へきたり居れば、けふ供にしつる也。もともわが別家同様之ものなれば、いとよくうけひて立出る。まづ亀戸へ詣まほしければ、高橋より本所へかゝり、行々て亀井戸よりこなたなる堤に出るに、うら〳〵と春のけしきいとよし。わきてけふは空もよく晴、あたゝか也。されば遠近にあゆむ人多し。こはけふ初卯にして亀井戸妙義参のあれば也。是よりやゝ行々に、船にて参詣するもあり。このあたり茶屋には赤前垂をひるがへし、いそがしく声立るさま、いといさまし。鳥居を入るに銅鳥居にして、額に「東宰府」の三字あり。是より境内に入るに、板の反橋あり。池ありていと広し。汀に杜若の跡あり。こは夏の頃床しく、又そのあたりなる池の巡りに藤もあり。春の末にはにほやかときけり。又是より小き反橋をわたり、又楼門を入て御本社にまうづる。左右には梅と立花を植られたり。境内、梅ところ〴〵に一木づゝあり。皆花ひらきていとながめあり。【境内に飛梅の雅木とて筑紫よりきたるあり／こちふかばにほひを挙よと梅の花主なしとて春なわすれそ】御本社の右手に「御嶽山」の額かゝりて、けふの祭日、妙義大権現の御社あり。「法性坊」の三字を書たる額あり。天狗の面などかざりあり。参詣群集せり。又このあたりに神符をあたふ所ありて、まうづる人これを受る也。みな髪に挟み、あるは羽織の紐などにはさみて帰る。境内には茶店もありて、いづれもにぎはえり。われは裏門より出て堤へ出る。このあたり餅あるひは土を以て団子とし、五彩に色どり、大なる柳の枝につけ、繭玉となづけ售ふもの多し。往還、是が為にせまし。是より一丁余にして萩寺といふあり。けふは亀戸の参詣人、この寺へもまうづるあればにや、ひとりの僧、鐘をたゝきてをる。萩寺の名ゆかしければ、われも詣で侍るに、至て小寺也。庭の面に萩の株あとあり。およそ三四十あまりも株数ありて、秋の頃ゆかしく思はる。寺号を慈雲山龍眼寺といふ。由緒ある地也けり。是よりすこしき小道に入て、右にとり左にとり、田甫をかよひて梅屋敷にいたる。こゝは東都第一の名所にして名高し。わづかなる庵もありて、清香庵と名づく。入口の扉は朽て風雅也。入口より右手に凡木の数弐十立もありて、小木也。左を真直に行ば、梅の木立数かりぎもなし。あたりには石碑抔も四ツ五ツあり。苔むして文字もあらはならず。其所には大きなる楓もあり。梅花はよき程の盛にして、その匂ひ袖にみちたり。こゝに専一の名木、臥龍梅と称するあり。こは龍の臥たるごとくにして、枝より枝は地中に入て、いづれを幹ともわかず。わたり五丈計も左右にながれて梢ひくし。むかしは十余

丈の大木ときけど、今は左程にも侍らず。この所に札立てあり。「御用木、枝折とるべからず」と書たり。是より奥に梅いと多し。こは又折戸をわけ入るゝ也。是よりは左右に木立あり。又茶店もありて、ところ〴〵に縁台かゝれり。こはいこふ人の為なり。こゝにてしばし花を詠むるに、十分に花ひらきて、香は蘭麝をあざむく。花の艶き極めて白く、夜は闇をしらざるありさま也。実花の名所ときくも理りなるべし。詠あかで時の移るをわすらるゝ迄に見ほるゝを、供のおのこにすゝめられ、やゝ帰さ路におもむきぬ。この屋敷に「臥竜干梅」とて、曲物に諸ひさぐめり。求むる人もいと多し。実はすぐれて酸しとぞ。是よりして道を右にとり、橋をわたりて行々に、こは堤の上也けり。茶店もあれど、いこひ得ず行々に、あぜ道もありて、此あたり田舎めきたり。請地といふをとおるに、こゝは植木をつくる所にして、つくり松いと多く、凡十町あまりもつゞく。いづれの庭にてもあらんか、とうたがはる。【この間によき御社有。天神のみやしろ也。道よりおがみ侍るに、鳥居に額ありてながめしが、わすれたり。】けふは新梅屋敷をもみんとて、思はずもこの所をみるは、殊に興多し。野辺の春げしき、中々にながめあり。かくて隅田川のほとりなる新梅屋敷といふにつきぬ。こは中頃より新に植し木なれば、皆若木也。「花屋敷」といふ額のかゝれる折戸を入て梅をみれば、半ひらきて匂ひいとよし。こゝは此廿日頃が盛とも思はる。何がしの短冊抔枝ごとにあり。碑抔もところ〴〵にありて雅地めかしたり。小き池もありて、杜若の株もあり。萩の株跡も其辺に多し。折戸の聯に「春夏秋冬花不絶」之文字にかなひたり。此池のむかふにいまだ未生の梅多し。其花の咲初たるは憎からず。これをながむる人、縁【椽につくるべし】板に腰うちかけて茶をすゝり、又はけぶりをふきつゝ称賛す。われもやゝひさしくみ渡して、こゝろのうきもわすらるゝ。此園中は亀戸の梅屋敷よりはせまし。却て亀戸よりは物あらた也。碑も多けれど、文字能わかりたり。鵬斎の梅之詩抔は大きなる碑にて数字鐫たり。芭蕉翁の碑也とて、其句に「春もやゝけしきとゝなふ月と梅　はせを」とあり。是等の碑はことに新しく、こゝに四ツ五ツ一緒にあり。そはしるすに遑あらず。こゝに又大きなる家ありて、梅の漬物をあきなひ、南田焼となづけ、陶器を製してうるめり。其品多く、梅の花、あるひは桜・都鳥抔の図をかきて、陶茶碗等也。われも楽焼之写茶盌をもとめて返る。さて園中を出て外より又ふりかへりながむるに、おしなべて盛のごとくみわたされ、白妙なるは、秋の明月、雪の朝もこれにはおよばず。是より松の隠居といふ門前をとをれど立よらず。こは庭に松ばかり植てあるときゝし也。尾上梅幸のあがなひもらひ得し屋敷ときゝぬ。こは何がし殿の後室、この梅幸をあはれみて、其余り此ところの屋しきをも給りけるとぞ。世にはかゝることもありと謾にをかし。かくて程もなく隅田川の堤にいづる。水鳥の群居るさまも奥あり。けふはこよなく日もてりて、此あたりそゞろ歩行の人多し。川の詠めは名にしおふ武蔵に名だゝる隅田川、しばしながめて行々に、川の岸辺に榜示ありて、「是より川上に於て殺生いたすべからず」とあり。是より少にして「三圍稲荷社」といふ額のかゝりし石の鳥居のまへにいたれば、こゝよりくだりてまうで侍るに、境内ひろく、萩の株跡、碑抔もあり、雅地なりけり。頓て本社に頭（ヌカ）づきて祈り奉り、室井其角の雨乞の妙句を奉りしもこゝ也けりと思はる。こは大社にして、詣人不絶ありと聞ぬ。かへさは小梅のかたへ趣く。鳥居より出て田甫にいづる。この鳥居が真向の鳥居にして表也。やゝ行々にてつゞらにまがり、小梅といふなる所にいたる。こゝには近頃流行の楼ありて、名を小倉庵とつけたり。けふはこゝにてものとゝのはんとて、門よりつといるに、むかふに閉し戸ありてみだりにいれず。「こは客人座敷にみちて透間なければ也」と断出るおのこの言葉に、本意なくもこゝを立出て、又川辺に出づ。松平越前守殿の御下屋敷を左にみて、頓て吾妻橋といふ大橋にいたる。これを渡りて浅草に至り、まづ腹空しければ、直に観音ぼさちにも詣でず、万年屋といふ楼に入て支度とゝのふ。かくて「金龍山」といふ額のかゝりし楼門を入て、敷石づたひに又「浅草寺」の額ある楼門をこえ、観世音にまうづ。【本尊ぼさちは仮堂におはする也。】誠にいつきても賑やかなることはたとへがたし。こは人のよく知るところ也。御本堂は御普請にして、竹やらひ四方にかこみて、「上野方」といふ棒杭あり。三社大権現にもまうで帰るに、軍書講訳・切芝居、いろ〳〵の見もの境内にみち〳〵せり。是よりは浅草通、心せきて帰る頃、道にて重兵衛に会合せり。則伴ひてかえる。黄昏頃、堺町・葺屋町を通りぬるに、人多く芝居の看板にみとれて立とゞまる。この所の茶店にて又ものとゝのへ侍りぬ。されば日もくれてければ、いと急ぎて小網町・北新堀より永代橋にいで、店に帰りぬ。扨けふの道は凡三里あまりの道法也しが、ところ〴〵よべの雨に水溜りありて、草履にても歩行せず、折々下駄てふものをはきてあるきしことなれば、いと草臥たり。かくて衣脱かへ、あたり片付て、けふの噺を店にてかたり、時もうつれば夕食を喰ひ、しばしありて四ツ時の柝木をたゝき初しをきゝて床

に入りぬ。

十三日。日よし。本誓寺にまうでゝ墓に水手向、念仏をとなへてかへる。けふは終日、店に出て侍る。こよひいつものごとくやすむ。

十四日。快晴なり。けふは十四日歳越といふて祝日也。けさ門口より床の間、都て入口へ削掛といふものをさぐる。こは江戸にかぎる也とぞ。その品は木をけづりかけて紙をつけ、出入の口々へ張事也。此とき注連を取払ふこと也。【けふ午之刻まへに竹川政孝ぬし、とひきませり。】こよひ厄払といふもの門へきたる。店にて碁をかこむものもあり。亥の刻ころに地震する。やゝたのしみて子之刻まへに床にいる。又丑之刻頃にも地震せり。こたびはゆるゝこと大きくして目覚しこと也。この後俄に風ふき出たり。

十五日。快晴。風大きにあらし。こは夜半の地震よりかくはあらぶきになりつと、かこつめり。けふは十五日正月とて店中のものに暇を遣し、宿下（ヤドヲリ）といふにやりぬ。こは田舎にて養父入といふにをなじこと也。けさ小豆粥をいはふこと也。何くれといそがわしくくらして、午時後、藤七を伴ひ遊びにいづる。まづ采女が原へ行て馬にのらん（責）の心あれば行々て、築地なる西本願寺は通り道なればまづ境内に入に、其ひろきこと実に言語に不絶、地中に寺院いと多し。五十七ヶ寺ありといふ。普請、漸く昨年の夏頃に成就せりとぞ。御手水場所より、いづれにも桜之木いと多し。みな小木也。こは花の頃ゆかしく、まづ本堂にまうづるに、いと難有し。阿弥陀仏にむかひ念仏をとなへつゝ帰るに、つら〳〵御堂をみるに、いと新に結構につくりなせり。さすがは本願寺とたふとまる。是よりまたはじめ入し門よりは出ず、外へ門より出ぬ。このあたり桜之木おゝく植られたり。かくて采女が原といふにいたる。こゝは広小路にして、むかし松平采女正殿屋敷ありし故、かく名づくと也。けふは馬貸ひとりもなし。あまりに本意なければ、愛宕下まで行まくおもひ、頓てかしこにいたり、馬に乗てなぐさみぬ。こは増上寺の裏門のほとりなり。うねめが原より馬場は遥によし。やゝしばし爰にて時移り、帰路には通り町を真直に行ば、銀座町なる玉之井といふ茶店に入て、ことやゝとゝのひ、日くるゝ頃に漸店にかへりぬ。【永代橋より、ことし初めての円月、いと高く出給ひて、此はしのながめよし。】さて、けふ未之刻頃に勢州津表より文きたりし迚告にければ、はやくもとりてひらき見るに、はからざりき、わが兄なる達孝大人の、いたづきにて去年の秋よりふし給ひしが、この早春の四日のゆふべ、なき人になり給ひしとの文也けり。是を見終りて涙袖をしぼり、過にしことどもを思ひ出て、残念いふばかりなし。我より心をとりなぐさみ、こよひは店にて愁傷の嘶のみいひ出て時うつりぬる。四ツ過に枕につきてふしたりしが、この事のみ思ひたえせで、心いと物うくて、又もたもとをひたし侍りぬ。

十六日。快晴なれど風吹て音はげし。まだ明やらぬよりめさみてければ、起もやられず、そゞろによべのことのみしのばれて、枕かひやりなみだにむせび侍る。われ廿日の忌、九十日の服なれば、ゆふべより神拝をつゝしみ、今朝も起出れど神拝はなさで、仏前へ額づき、やゝ念仏をとなへぬ。けふははやくも二七日の侍夜なれば、いとねんごろに弥陀を念じ侍る。ものみなつゝしみて、よろづものさびしくぞなしぬ。さて午之刻過より本誓寺にまうで、我兄のために香花を手向、しばし回向に時うつしぬ。本堂・地蔵堂いへばさら也、観音菩薩もおがみ奉りて、二世安楽とみだ唱へ、頓て称名院に入て本尊をおがみ奉る。かくてかへさには寺町なる閻摩（ママ）堂といふにまうづ。こはけふ御縁日とて人のおゝくまうづる也。閻魔王はいと大きくて恐ろしげ也。あつく拝し奉り門を出るに、此あたりいろ〳〵のものをあきなふ人多し。そが中に、としわづか七八才なる少女が扇をひらき、いとさら〳〵と文字書さま、雅さものには似つかはしからずと称賛するありて、人つどふ。こはさかしき少女也と感じ侍る。さてもけふは思ふ筋の物まうでなれば心物うく、此遠近をさまよふ。乞食にびた壱文宛ほどこしぬ。こはすこしの心ざし也。かくて店に帰る。けふも店之者は暇を乞て出行あり。正月の遊び日なれば、囲碁をなぐさむもありて、世はめでたけれど、われはうきに沈みておもしろからず。きのふよりの荒風なるも、けふ申のさがりより静になぎて、こはよし。こよひなすこともなく、亥の刻頃に寝侍りける。

十七日。快晴。けふは状日なれば、ふみかきしたゝめて時をうつす。未之時頃には本誓寺へまうづ。けふは二七日の正忌日なれば也。さてものさびしく日を暮しぬ。【けふ梨子をもらひたり。春のなしはいとめづらし。】こよひ月並の

百万遍あり。こはあすのよが月毎の定めなれど、二七日にあたれるをもて、わきてこよひになし、也。導師の坊は称名院より所化衆みえて、頓て念仏をはじめぬ。大きなる数珠とり出して円座になりて操ける也。其人々にはわれをはじめ、伊助・清兵衛・宗七・善吉・長兵衛・弥兵衛・惣太郎・藤吉・友吉・利吉・金蔵・源太郎・徳兵衛・小八、以上十四人店之者也。其余、此日来たまひし大門の中島源左衛門叟・売場藤七・江川場の彦四郎・肴屋源兵衛・大工の卯之助・栃木の吉三郎、彼是ともに弐拾壱人、称号となへていと高やかに唱へつゝ、しばしうつりて果にけり。かの坊はことみな念じて百万遍はすみぬ。さればわれもやゝ念じ侍りぬ。是より坊様にもてなし酒をすゝめて帰したり。布施は青銅弐拾疋を、こよひはべちにまして出しぬ。こよひもなすことなく、いつものごとくやすみける也。

十八日。日よし。【けふ小豆粥を食す。是を「大師粥」と号し、又「十八がゆ」ともいふ。元三大師へ供養のこゝろなるべし。】けふは怠りし日記など書つゞり居たりしに、故郷の文つきて、又もたもとをぬらしたり。恩愛の情やるかたなし。やゝ時のうつれるをわきまへず、こよひ文抔かきていつものごとくふしたりしが、いと胸くるしく侍りぬ。

十九日。けふは冴かえりていとさむし。空晴わたるにもあらず、又くらくやら(ママ)ず。朝より故さとぶみに他念なくて、昼飯をとゝのへ、頓て本誓寺にまいりぬ。香花手向て念仏となふ。この時霙めきたるものふり初たり。時午之刻頃也。墓所よりかへる程、猶ふりきたりてやまず。是より店に帰りて、状を沢山に書おはりて、日くるゝ頃封じ果たり。扨けふのふりしは雪になりて、日くるゝ程、牡丹〳〵とふりつもれり。川岸に出て雪げしきながめぬ。よに入いよ〳〵ふりつもれり。まづこぞよりの雪也ければ、いと珍らしき心ちぞする。こよひ四方八方の嘶をなし、四ツ時の栃木きゝて床に入りぬ。

二十日。日よし。きのふの雪半きえて班にのこれり。けふは店中いはひの愛比寿構(ママ)なれば、朝よりいと賑はしくて、二階へは大黒・愛比寿を勧請なし、七福神の画きし軸をかけ、大きやかなる膳にうづ高く盛し飯をそなへ、こは伊介と重介の盛そなふなり。みそ汁・生酢いろ〳〵に、大根は株よりその侭そなへ、海老に鰡、其余とり〴〵に備へ、御あかしを献じ、神酒を奉る。いとめでたし。併われはおがみ奉らず。精進もきのふまでつゝしみしが、けふは人のすゝめにて精進をやめけり。かくて店中打揃、朝飯をかの膳部にていはひ、かさねたる盃とり出てかたみにいはひ傾けて、賑やかに□(難読)侍る。けふは廿日正月とて、終日あそびくらしけり。こよひ二神にそなへし神酒・御供、店中おのも〳〵にいはふ。こは店にて頂戴する事也。われひとりは慎みてなさず。かくて膳びらきとせる。こよひ打そろひ酒肴さま〴〵にとり出て食する、いとにぎやか也。出入之ものみな〳〵きたりていはひける。けふは一日、人の出入しげくてよろこばし。是より碁をかこみたのしみて時過ぬ。されば亥の刻半とも思ふころ、ふしたりけり。

廿一日。日よし。けふはなすべきこともなし。頓て故郷のふみつきてければ、ひらきみるに、ことのまことの涙にせまりて袖ぞぬらしぬ。

故郷の空ぞなつかしたらちめのおくりし文をみるにつけても

【こよひ黒江町なる柳橋の音曲ばなしをきゝにゆきぬ。柳橋はをらで、柳枝をのみきゝたり。】こよひもいつものごとく寝たり。とにかくねぶりかねしが、やゝまどろみ、丑三過るころ、ふとめさめぬ。折しもあれ、雁がねの一声鳴て過るをきゝぬるに、わが身もかこたれて、

あはれなる夜半のねざめに雁金もをなじ思ひや鳴わたる也

廿二日。快晴。けふは状日なれば文したゝめけり。喜兵衛といふもの、午之時頃きたりて面をあはす。こは店につとめ居しもの也。けふも一日店に居てつとめたり。こよひかぎりの精進もなし終りぬ。こは十五日より七日の間のつゝしみ也。廿日はいはひ日にてなさゞれば、こよひまで也。かくてこよひ藤七とゝもに、又もゆふべの柳橋のはなしをきゝにゆきぬ。面白からぬはなし也。こよひは又柳枝はをらず。この席にて景物とて種々の品を三ツほど出して札をうり、くじ引をなし、その品をとる也。こは一番二番と品定置て人に与ふ也。是もをかしき事ぞかし。柳橋のほこりかに、やなぎと橋を染たりし手拭を出し、夫も景物となすはこよなくをかし。漸亥之刻前に過ければ店にかえりぬ。かくて程なくいねたり。

廿三日。空心よく晴渡り、風もなくいと暖和なり。津表より書翰つきて、取手も遅しとひらきみるに、いとあはれにかゝれたり。戒名さへに書おくりければ、胸ふたがりていとせつなし。「湛誉行然信士」とあり。かなしともいはん方なし。すなはちけふは三七日之退夜なりければ、仏前に香をたき、鉦うちならして念じ侍る。けふ黄昏過る頃追に、いさゝかの雷鳴あり。こは今年の初雷也とて人々煎豆（イリマメ）を食す。われもそをくらひたり。こよひもいつものごとく寝けるが、けふの文のいとせつなく、ねぶりかねぬ。さてまた丑三頃にも雷鳴あり。こはいさゝかの音なれど、しばし鳴やまず。

廿四日。美晴にて暖かし。朝より用意して称名院にまうづ。こは行然信士の三七日の正忌日なれば、いさゝか布施の心して回向をたのみ侍りぬる也。卒都婆も立て、香花を手向る。頓て店にかえり、子供をつれてとゝのへものに出行。暮過る頃かえりぬ。【けふ竹川政寿主とひきませり。】【こよひ下総八日市場、磯屋三郎兵衛といふ人に面談す。名字を深田といえり。】こよひ御忌中にて御停止の御触あり。こはいと重き御忌中にていとかしこし。けふより来月八日まで十五日ヶ間の御停止也。扨物さびしくも床に入り、ふし侍りぬ。

廿五日。快晴。けふは朝より種々のもの片寄てひとつになし、頓て重兵衛つれて芝なる増上寺へ行ぬ。こは御忌あるよしきゝければ也。【用水桶之しるしは奴とかいふ菱なり。こは有馬玄番頭殿のしるし也。御火消になられしとぞ。】さていそぎて行々、かの門前なる小ばやしといふ茶店にいこひて、斯て詣づるに、山門のいとひろき、いはんは愚也といふべし。是よりしばし行て又楼門あり。此内よりは敷石づたひに本堂にいたる。先ぬかづきておがみ奉る。誠にいとひろきこと目も及ばず。御堂のきら〳〵しき葵の御紋の御厨子もたふとし。唯ひとり坊が唱ふる称名の声のみきこゆ。扨はけふは御忌の法会も御忌中にて述つると察せらる。いと御寺内静也。さればこの御堂の裏なる黒本尊にまうづ。結構いはん方なし。石段をあがりてまうづる也。前には橋もありていと威高し。是より鐘楼をながめ、道をかへて裏門へ出る。誠に寺内ひろきことたとへなし。かくて馬場に出れば、馬かりて一鞭のりしが、はやく下りて通道を行に、銀座なる万屋といふ鼈甲屋へ入りてことじをかひ、是より文魁堂にて筆とゝのへ、金花堂にて紙をもとめ、軍書きかんとて日本橋まで至り、四日市の裏□□□（ムシ）の席に至るに、御忌中なればやすみたり。こゝに浴室のいと奇麗なるもあれど、こもけふはやすみて入れず。かくて腹空しくなりにければ支度とゝのへんとて、このあたりなる茶店に入るに、こゝも事なさず。漸に南新川なる肴屋何がしといふものゝ家にて飯をたべぬ。尤こゝにても参会ありて断られしが、わりなくたのみてとゝのへたりける也。是より日くれて過る程、山田五郎助殿の裏に、隠居庄兵衛といふものあり。こは重兵衛の妻の妹の家也。こゝにて炉灯をかりて乙女ばしより永代に出、店に帰りぬ。こよひは風あらくして心うし。亥の刻に寝ぬ。八ツ半頃とも思ふ頃目覚しに、鐘の音しきりにきこゆ。こは火事也と思ひ、物見櫓に出てみるに、いと大きなる火之手也。されば急ぎて火事場に行に、思ひの外にとをくて、小日向服部坂の辺也。そこに至るに、夜は明たり。尤行の道まわり〳〵てければ、いと遠く覚えたり。かくて帰路はいそぎにいそぎて、水戸殿の御屋敷より聖堂の表門を過、筋違の御見付より神田を過、江戸ばしをわたり、茅場町より箱崎に出づ。こゝにて肴屋源兵衛といふものゝ家にて装束脱て店に帰りぬ。昼の五ツ時頃なるべし。店は又戸がメてあり。たゝきて入るたる也。

廿六日。快晴。風あらし。さて腹はへりて物ほしければ、いそがして朝飯とゝのふ。よべの道は行帰り三里に遠し。けふは小網町広屋に居る猪蔵ぬし年礼にきたりて、いろ〳〵の噺してよろこびぬ。頓て忠兵衛隠居へ遊びに行ぬ。けふは状日なれば文したゝむ。八ツ半頃に平野丁の浴室に行ている。こは三角なるは御停止にてやすみければ也。かくて又認をきし文の次々を書て、日くるゝ頃封じぬ。こよひなすこともなく、よべのことにていと草臥たり。『三七全伝南柯夢』抔いふ文みて、夜闌てやすみける。

廿七日。空晴たり。風は荒吹にて心うし。けふ徳兵衛を遣して、小日向遠山安芸守殿のみうちなる鈴木猪太夫殿の安否をとはせたり。こはきのふの暁の火事見舞也。かゝりしかば、頓て帰りきていふにぞ、出火のありし所よりは半町計の隔てなれど、風上にて無難なるよしきこえてよろこばし。さてけふはわがものおゝく片寄て、箇になしおきぬ。是にて時もうつりたり。けふも『三七全伝』といふ馬琴翁の作なる書みて捨がたく、やゝ日もくれぬに驚きてよみやめぬ。こよひ湯屋より仕込湯也とてしらせきて行しが、いとねもごろにもてなしつゝ

ふろに入ぬ。斯て店にて亥之刻迄つとめ居、夫よりふし、戸に入ていねぶりたり。

廿八日。美晴也。風ふく。けふは『南柯夢』といふ草紙をよみぬ。終日店にてすわり居たり。こよひ戌の刻頃より小雨ふる。しばらくありてふりやむ。とにかく照がちにて、ふり兼たり。一ト潤（ウルヲヒ）いのる事ぞかし。かくて亥の刻過にふしけり。寝覚してきくに、雨の音きこゆ。いと淋しくてふたゝびねぶりかねたり。時は丑の刻過とも思ふ頃なるべし。【この日記、十一月十五日より正月廿八日まで、七十三日のことをしるす。】

（外題）「江戸日記　下」

正月廿九日。快晴にて、いと暖和也。風も静になりて長閑になりぬ。よべの雨の跡もなし。こはすこしのうるほひなれば、はやくもかわきしならん。【大泉寺といふ禅僧、祈祷にみゆる。こはいせ田丸之住也。今江戸神田に住せる也。年々正・五・九月にみゆる也。むかしよりのならはしとなり。】けふは故里へ遣しぬる文かきしたゝめたり。午之刻頃、地震あり。大きなるゆりにて恐れけり。是より店に勤めおりぬ。申之刻頃より本誓寺にまうづ。香を手向て念仏をとなふ。かえさには霊岸の寺内をぬけて、藪中庵といふ茶店に入ぬ。【霊岸寺境内いと広し。堂もたかし。】こは世にいふ藪蕎麦の名物也。これを食んとて行ける也。いと繁昌にて賑はえり。庭の面もひろし。池抔もありて趣きあり。梅の花三本ありてながめよし。何がしの短冊も付てあり。しばらく待て女の童が彼くろむぎを出せり。おゝく食して、日のくれ頃帰りけり。こよひ店に居ていつものごとくいこひぬ。

晦日。快晴。又風ふき出たり。此頃怠りし日記書つゞりて、終日是にて何ごともなさず。漸にけふまでの日記書たり。こよひは物思ひしていこひぬ。『南柯夢』といふ文、三冊よみける。

二月朔日。けふは朝はやくおきいでつ。空はよく晴渡り、風はふきたり。まづかみゆひくしけづり、ゆあみもなし、漸にこと調へて、徳兵衛といふ僕を打つれて本誓寺にまうづる。しばし称名院にて火にあたゝむる。こは今朝氷はりて、墓前を掃除なしたる故、こよなく手をかゞめし也。斯て四日市に所用あれば大橋をわたり、江戸ばしを打越てかしこに至る。夫より大坂屋によりて尋ることあり。かくて鎌倉川岸より行々て、小石川御門に出づ。水戸様、百軒長屋のほとりを過、真直に行々に、上水のかよふ堤のほとりに出ぬ。こゝに傍（ママ）示あり。「一、此囲堤通上水見廻り之者之外、猥に通路すべからざる者也。月日　奉行」とあり。こは此囲堤ながければ、此傍（ママ）示いくつもあり。是よりして小日向台町なる遠山安芸守殿の屋敷にいたり、鈴木猪太夫殿の宿をたづね、おとなふに、少女之子はやくも出迎えて座敷にいたる。こはわが祖母の姪の内也ければ、いとよろこばれて、夫より種々の噺に時うつりぬ。くろむぎの馳走にもてなさる。猪太夫主は美濃表なる御知行所へ冬よりゆかれて、今は留守也。さればおとみ子がいと豆々敷もいたされて、おもはず時うつりて、漸に申之刻過る頃、暇まふして立去たり。かくて服部坂より麹町へ出、霞が関を打越て大名小路より山下御門をぬけ出て、銀座四丁目なる万屋何がしといふものゝ家に入て、すこしき用事すましつ。日は山下御門よりくれかゝりて、通り町へ出たる時は暗かり。さて腹も空しければ、此銀座壱丁目、玉之井といふにて茶漬をくひ、いそぎて店に帰りぬ。いと草臥たり。店にていろ〳〵の噺なし、いろ〳〵の草紙をみて、亥之刻過に床に入ぬ。

二日。快晴也。風も静に成けり。けふは状日なれば、ひねもすしたゝめて封じぬ。本誓寺へ未之刻頃まうでたり。『護国女太平記』といふ文みて、こよひもいつものごとく寝眠りぬ。

三日。快晴にていと暖和なり。春のこゝちなし侍る。終日なすべき事もなく、此頃よみかゝりし草紙を弐冊あまりよみたり。けふは山田新太郎の店なる平兵衛妻子いとま遣しぬ。こは旧年よりしていづくにか逃行しが、又春かえりきて侘にけり。されど元来性分よろしからねば、此度ながく暇差遣したり。治輔を山田の支配になしたり。こよひはことしの初甲子にして、店へ大黒天の像を安置し、これに茶飯、大根の料理をそなへて神酒を献ぜり。いとよろこばしき事也かし。こよひ少しき用事ありて、子の刻半過頃までおき居たり。かくてものすまして良ねぶりけり。

四日。日よろし。けふは勢州表へつかはしける状ありて、何くれとかえりごと書しめして、漸に封じぬ。午之刻頃より雨ふり初けり。かくてくるゝ頃までふりみふらずみして、はか〴〵敷うるほひもせず。けふ昼飯にはおいと方へよばれたり。平さかなにて、いと沢に喰ひけり。こよひ暮過てより雨しきりにふりきてよろこばし。扨けふの文、時移りて戌の刻半すぎて、藤吉・金蔵して日本橋なる大茂へもたせ遣しぬ。こよひ子の刻過より雪になりたり。いとさびしくいねぬ折から、雪中の雁鳴わたりて哀をそゆる媒となれり。

五日。朝疾起出てながむるに、庭は白妙に雪ふりつみて、いとめづらし。こぞの冬より雪いと稀にて、過し正月十九日に降積し雪よりはまだ多くて、川岸のながめいとよし。されど時うつるに随ひ、春の淡雪きえやすくて、のこりすくなく消にけり。扨けふの日はいとよく晴たり。終日店にひかえゐる。『南柯の夢』といふ草紙よみて日をくらしぬ。しかしけふ、辰之時ごろより午之時までは、むら〳〵と小雪ふりけり。此朝のけしきあくがれて、

めづらしく雪ふりつみてこの朝だいとゞながめも深河の里

立かえりまた空さえて二月や花にはあらぬ木々のしら雪

や、しばし花とながめしかひもなく朝日にきゆるきゞの白雪

またれつるさくらが枝にふりつみてまづながめばや花の白雪

まだ芽ぶかぬ枝もひとつの色みえて梅の花そふ春のあは雪

こよひ日記を書うつして、くさ〴〵のことに時移り、亥之刻過にふし侍りぬ。折からまくらのうへに雁鳴て、物思ふ身はかこたれける。

我ばかり世は春ながらうき秋としりてや雁のおとづれにけり

もの思ふ頃とは誰かつげつらん折からつらき雁金の声

さてこよひ七ツ時にもあらん、地震ありて夢ゆりさまされたり。又ねぶりもやらでもの思ふ頃、暁の鶏鳴ければ、

よやふけぬ時やいかにと思ひしにね覚折よき鳥の声かな

暁の空つげがほに声立て鳴が八声の鶏のかず〳〵

六日。美晴也。けふは状日にして、ふる里のふみ書したゝめぬ。さてもけふ巳之下刻には、御台所様御棺槨、上野へ被為入候とて御触あり。町中いと静なり。自身番々々へ家主の面々昼夜ともに詣るなりとぞ。わきて空長閑にしづかにて、治まれる代之御掟、いともかしこき事也かし。店も表に手桶をかざり、水を入て出しおきぬ。扨おのが業は何もなさで、故郷なつかしみおもふ頃、

さらでだにそれともわかぬ故郷の空あやにくに霞こめつゝ

頓て日の暮れて、ぼん〳〵と入相の鐘きこえければ、

入相のかねにつけても何となくふる里恋し夕ぐれのそら

こよひ店につとめ居ぬ。湯屋より仕込湯つげこすれば、きぬかえて浴をなしたり。いとこゝちすくよかになりぬ。是より時移りて寝たり。

七日。空くもりたり。頓て巳の刻前にもあらん、雨ふりそめけり。春の雨のいと淋しく、ふるともみへで時過るほど、いよ〳〵ふりきてとだえなし。午之時頃にはをやみ少しくあり。かくてくるゝ程、猶雨ふる。

春雨の晴ぬながめにけふの日はくるゝもしらで過にけるかな

けふはいろ〳〵の物片寄などして心いそしく暮たり。此時伊勢なるわが旧里より六日限早便のふみつきて、何ごとやらんと胸とゞろき、封押ひらきてそをみるに、絶て音信のなきとて、たよりならざるよししめされけり。こはふみのとゞきのおそくして、返翰のいまだとゞかぬものから、われにことこそあらんとて、かくははやにて来翰せし也。いともたらちねの思ひ給ふぞありがたし。親の恩こそ報はざれず。まことに倉海(注)も浅しといはん、芙蓉の高嶺も是にくらぶるれば猶低し。ふたゝび三度いたゞきつゝおさめ置ぬ。こよひもなすこと多くていと心せかるゝ。頓て子の刻頃にふし侍りけるに、雨やまずふる音のさびしければ、

軒端よりつとふ音さへきこえきてわきて淋しきよ半の春雨

是よりいつとなくねぶりける。ふとよふけて夢覚たり。折から庭の梅がえまくらにちかくにほひきて、嬉しさのあまり筆とり染て、

いづくより隙をもとめてにほふらん枕にちかき庭の梅が香

また夢結ぶほど夜は明ぬ。朝寝せしが、あさけの鶏にいさめられて、漸に眼はさめたり。

本稿はJSPS科研費(19K00300, 19H01293)による研究成果の一部である。

Reprinting and Explanatory Notes of "Edo Nikki" written by Yoshitaka Ozu.

HISHIOKA Kenji (Japanese culture), RYUSENJI Yuka

Reprinting and Explanatory Notes of "Edo Nikki (The manuscripts of his diary)" written by Yoshitaka Ozu(A merchant of Edo period).